

■ロックウール耕によるパプリカのつる下げ誘引仕立て栽培

パプリカはオランダや韓国などからの輸入が年々増加し、その栄養価、彩りから新しい食材として注目されています。近年の需要の増加に伴い、高知県においてもパプリカの促成栽培に取り組む事例が見られ始めました。

オランダでは、軒高の高いガラス温室を用いた養液栽培によるハイワイヤー方式で生産されており、10a当たりの収量は25～27tです。一方、わが国では、軒高の低い従来型のビニルハウスを用いて、普通ピーマンと同様に、1株当たり2～4本仕立てで主枝を摘心し、側枝に着果させる摘心仕立てで栽培されており、10a当たりの収量は7～8tと十分ではありませんでした。

そこで、当センターでは、主枝着果性が強く、側枝の発生が少ないパプリカの生育特性に着目し、キュウリやトマトで利用されている「つる下げ誘引仕立て法」について検討しました。その結果、主枝2本のつる下げ誘引仕立てでは、摘心仕立てに比べて収量が著しく向上することが明らかとなりました（図1）。さらに、1a当たりの栽植株数を370株程度（うね幅180cm、株間15cm）とすることで、10a当たりの可販果収量が赤系品種「スペシャル」では16t、黄系品種「フィエスタ」では20t得られ（図2）、16～20tどりが可能と考えられました。

今後は、土耕についても検討する予定にしています。

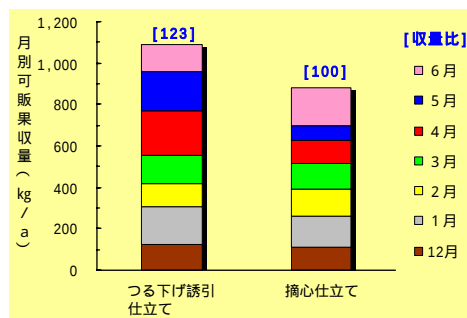


図1 仕立て法がパプリカ「スペシャル」の月別可販果収量に及ぼす影響(2000～2001)

注) ロックウール耕。定植日:2000年9月14日。培養液:山崎ナス処方準拠0.8単位。栽植様式:うね幅180cm, 株間25cm(摘心; 50cm), 主枝444本/a。調査期間:定植時～2001年6月30日

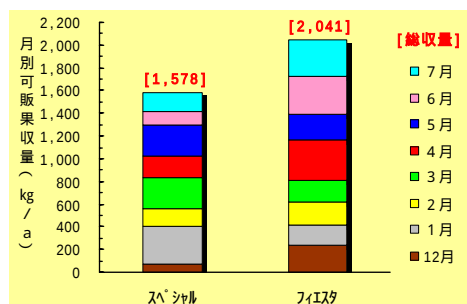


図2 パプリカ品種と月別可販果収量(2001～2002)

注) ロックウール耕。定植日:2001年9月14日。培養液:山崎ナス処方準拠0.8単位。栽植様式:株間15cm, 370株/a。主枝2本つる下げ誘引仕立て。着果位置:主枝または第1次側枝の1～3節に1果。調査期間:定植時～2002年7月31日。

[施設野菜科 山本 正志]